1　授業改善５点セットの設定例

「学校評価の4点セット」の＜重点的取組＞の一部と「授業改善5点セット」の【取組内容】を重ねることで学校の取組を焦点化・重点化した小学校の事例

教育目標

よく学び　心豊かで　たくましく生き　〇〇小に誇りを持てる子どもの育成

＜重点目標Ⅰ＞
授業改善による
学力向上

＜重点目標Ⅱ＞
思いやりあふれる
学校環境づくり

＜達成指標＞
各種学力調査で、
偏差値50以上

＜重点的取組①＞
見通しをもって授業を組み立て、何が分かったか子ども自身で振り返る場を設定する。

＜重点的取組②＞
子どもの考えを深化・拡充させるために、ペアやグループの活動の場を設定する。

校内研究

【授業改善テーマ】
主体的に活動し、学んだことをまとめる力を育てる授業
～算数科を中心として～

【授業改善の重点】
1　質の高い課題と子ども自身による振り返りのある授業の推進
2　子どもの主体的な活動のある授業の推進

【取組内容①】
＜振り返りの場の工夫＞
授業で分かったことを、子ども自身で振り返る場を設定する。

【取組内容②】
＜ペアやグループによる交流活動の工夫＞
自分の考えを深化・拡充等するためにペアやグループ活動の場を設定する。

【取組指標①】
単元を見通した上で1時間の課題を設定するようにし、毎時間振り返りの場を設定する。随時子どものノートを点検してまとめ方を分析し、授業改善に反映させる。

【取組指標②】
可能な限り毎時間、ペアやグループ活動を行う。随時活動の前と後の子どもの変化を分析し、授業改善に反映させる。

【検証指標①】
■学校評価児童回答者における割合
「授業で分かったことを自分の力でまとめることができた」と回答する児童の割合90％以上

【検証指標②】
■学校評価児童回答者における割合
「ペアやグループで、自分の考えを話すことができた」と回答する児童の割合90％以上

＜重点的取組③＞
学習規律の徹底

（その他の取組）
・板書の構造化・板書とノートの一体化
・個々の状況に応じたきめ細かい指導
・言語活動を重視した国語の単元計画作成
・スキルの充実

＜達成指標＞
各種学力調査で偏差値50以上

2　ＣＨＥＣＫを生かした取組指標の再設定の例

この学校では、数値的な結果だけでなく、成果や実践上の悩み・困りを共有して、取組指標をより具体化し、再設定している。

【授業改善テーマ】 主体的に活動し、学んだことをまとめる力を育てる授業

【授業改善の重点１】質の高い課題と子ども自身による振り返りのある授業の推進

年度当初

【取組内容①】
＜振り返りのある場の工夫＞
授業で分かったことを、子ども自身で振り返る場を設定する。

【取組指標①】
単元を見通した上で1時間の課題を設定するようにし、毎時間振り返りの場を設定する。
随時子どものノートを点検してまとめ方を分析することで、授業改善に反映させる。

【検証指標①】
■学校評価児童回答
「授業で分かったことを、自分の力でまとめることができた」と回答する児童の割合を90%以上にする。

１学期末チェック

A　授業で分かったことを子ども自身に振り返させるための場の工夫に努めたか？

振り返る場の工夫（%）	
よくできた	0
できた	31
もう少しだ	61
できなかった	8

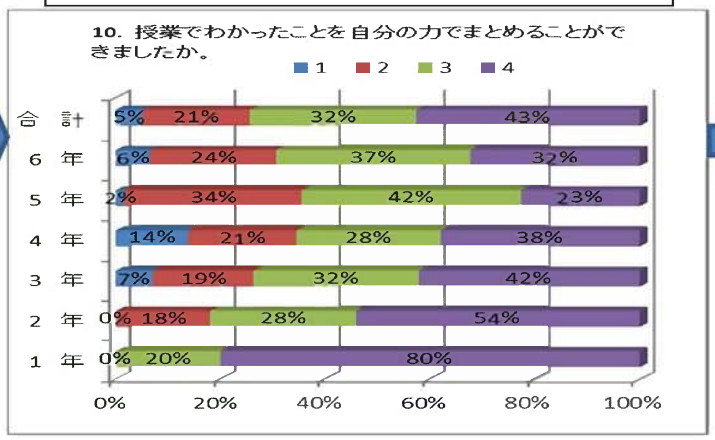
B　子どものノートを点検してまとめ方を分析することで、授業改善に反映させたか？

ノートの点検（%）	
よくできた	0
できた	24
もう少しだ	38
できなかった	38

1　単元を見通した上で、1時間の課題を設定することは全員が取り組めた。
2　振り返りの設定の工夫は31%の教員しか十分でない。
＜有効な工夫＞
○ポイントを聞く→文章化　○(　)埋め→次第に文章へ
○解き方を説明させる。○キーワートを与え考えさせる。
○グループで相談させる。　○類似問題で振り返らせる。
○自分のまとめと全体のまとめを朱書きで併記させる。
○自分のまとめを評価させる。
○振り返りにつながる課題を設定する。
＜問題点＞
●まとめの時間が足りなくなる。●教師がまとめてしまう
●発達段階に応じたまとめ方を研究する必要がある。

3　ノートを分析して授業改善に反映させている教員は4分の1
＜有効な分析・改善の方法＞
○ワークシートに自分のまとめと全体のまとめを書くようにすると比較でき、点検・分析が容易になる。個別指導の改善にもなる。
○上手なまとめ方を取り上げてモデルを示すと分かりやすい。
＜問題点＞
●低学年は書くことに時間がかかる。
●授業中の点検は、書けない子への指導が主となり、全員は無理。
●どのような振り返りを目指せばよいのか、共通理解し、子どもにも意識させる必要がある。
●随時ノートはチェックしたが分析までは至っていない。

全校で75%の児童ができたと回答



９月からの

【取組内容①】
＜振り返りのある場の工夫＞
授業で分かったことを、子ども自身で振り返る場を設定する。

継続
＊振り返りの場の設定をまず100%にする。
振り返り時間の確保と、効果的な振り返り方を検証し、引き続き取り組む。
・自他のまとめの比較
・上手なまとめの紹介

【取組指標①】
単元を見通した上で1時間の課題を設定するようにし、**後で活用するまとめができるような指導を繰り返し行う。**
まとめの苦手な児童を特に意識して指導する。

随時ノート点検・まとめの分析を行い、有効な振り返りの工夫を記録する。
＊「後で活用するまとめ」という観点でまとめさせ、その観点で点検・指導する。
＊点検方法を多様化するよう改善する。

【検証指標①】
■学校評価児童回答
「授業で分かったことを、自分の力でまとめることができた」と回答する児童の割合を90%以上にする。

継続
＊振り返り時間の確保と新たな取組指標をもとに肯定的割合を増やしていく。

3　短期の検証・改善を繰り返して授業改善を進めた例

【授業改善テーマ】
自分の考えを持ち、伝え合う力を育てる児童主体のわかる授業（算数を中心に）

【授業改善の重点】
1　自分の考えを持つ場や発表する場のある授業の推進
2　課題解決型の授業の推進

【取組内容①】
〈考えをもつ場・発表する場の工夫〉
自分の考えをまとめ発表できるよう、自分の考えを持つ場を５分以上設定する。

【取組内容②】
〈課題解決型の授業の工夫〉
１時間の流れを意識し、めあてや課題が明確な授業を行う。

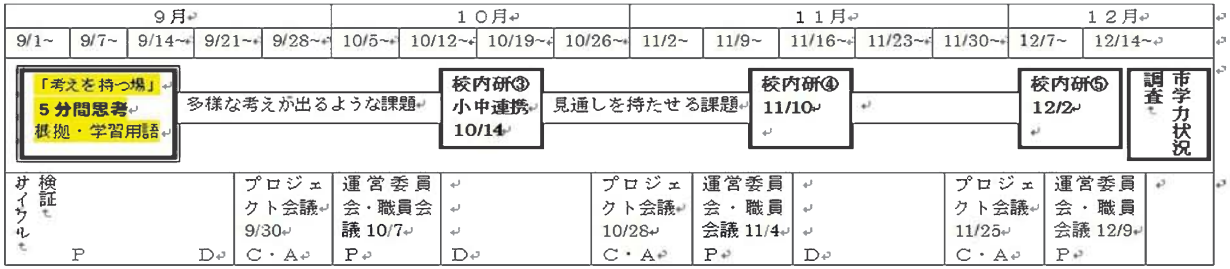
【取組指標①】
１時間の中に、算数用語を用いて自分の考えを書く場を最低５分間、毎時間、設定する。
セルフチェックを記録し、問題点を明らかにする。

【取組指標②】
前時との違いを明らかにし、多様な考えが出るような課題を毎時間設定する。
セルフチェックを記録し、明確な課題となる条件を探る。

【検証指標①】
自分の考えをノートに書いている児童８割以上。
発表する場で手を挙げる児童６割以上。

【検証指標②】
課題に対して多様な考えが出て、算数用語を使ったまとめができる児童８割以上。

この学校では、9月当初は取組内容①を中心にした取組を行い、次第に②に授業改善の中心を移行させている。進行管理を2学期初めに示すことで、見通しをもった授業改善となっている。1か月ごとに取組を検証し、改善のためのアクションが具体的に示されている。



９　月	
CHECK	ACTION
○5分間思考をし、自分の考えを持たせることはできた。 △クラス全員に自分なりの考えを持たせることはできいない。	☆各自に考えを持たせるため、習熟の程度に応じた手立てを講じる。

10月	
CHECK	ACTION
○各教科に応じた具体物（半具体物）の操作や具体例の提示、図や表（思考ツール）の活用をすることで、自分の考えを持たせることができた。	【考えを持たせる手立て】 ☆分かっている子どものところに聴きに行く。 ☆分かっている子どもに解決の見通しを発表させる。 ☆解決の見通しが持てない子どもに対しては、習熟の程度に応じた指導を行う。

11月	
ACTION	CHECK
☆習熟の程度に応じた指導とは、どんなことなのか共通理解する。 ☆課題の質（子ども興味関心・多様な意見・意見の練り合い等）について共通理解する	○課題についてのセルフチェックをするとともに、自分の考えを持たせるため、解決の見通しが持てない子どもに対しての手立ては持てた。 △習熟の程度に応じた指導とはどういうことなのか、ということについての共通理解が不十分だった。

12月	
ACTION	CHECK
☆1時間の授業の流れを見直し、練り合う場面を充実させた授業展開を試みる。そのために、課題の提示や切り返しの発問を工夫する。	○課題の質については、疑問形にする等意識して取り組むような努力は見られるようになった。 △多様な考えが出る課題や意見の対立が見られる課題についてはあまりできなかった。

4　研究主任と教務主任の役割分担の例

○○小学校　運営組織図

校　長

教　頭

運営委員会
校長、教頭、教務主任、研究主任、生活指導主任

重点目標	基礎基本の定着と活用力の育成
達成指標	○学期ごとのまとめテストで、昨年度末の1段階の割合を50%減少 ○△△市学力状況調査で1段階の児童の割合を昨年度より30%減少
担　当	教務主任

重点目標	あいさつのできる子の育成
達成指標	○自己評価アンケート（児童・保護者・教職員）で「○○小の子が先に明るくあいさつするようになってきた」を90%以上
担　当	生活指導主任

重点目標	進んで体を動かす子の育成
達成指標	○児童アンケートで「進んで体を動かすことが好き」を90%以上 ○「休み時間によく運動場や体育館で体を動かして遊んだ」を90%以上 ○「朝ごはんを毎日食べている」を90%以上
担　当	体育主任

授業・学力・情報プロジェクト

重点的取組	①自分の考えを持つ場」「発表する場」のある児童主体のわかる授業の徹底 ②「課題」の質の向上 ※５点セットの授業改善の重点	その他の取組	③学習規律の共通理解と徹底 ④朝読書での読書力の育成 ⑤基礎基本の定着を図るスキルタイム ⑥活用する問題を解く。	⑦放課後補充学習と家庭学習の徹底 （各学年の課題に応じて）
取組の内容	①授業での「自分の考えや説明」を書く場の設定 ②隣接学年短時間で見合い・相談。校長・教頭の授業観察による助言。	取組の内容	③学習規律の共通理解と徹底 ④朝読書（火・水・金） ⑤スキルタイム（月・火・木・金10分） ※時間確保と子どもへの意欲づけ ⑥単元終了時に活用する問題を解く。	⑦月・金の放課後補充学習を全教職員で実施。 ・家庭学習がんばりカード定着
担当	研究主任		研究主任	教務主任

①授業改善	②互見授業	③④⑤⑥ 学習規律・学習習慣	⑦補充学習
授業改善5セットと授業改善計画の立案、校内研究全体の推進	「互見授業ウィーク」の設定・計画、進行管理 授業分析	進捗状況の把握 見直し	学習計画、個人データの管理、「家庭学習の手引き」の見直し、進捗状況の把握
研究主任	教務主任	研究主任	教務主任

中学校学力向上対策　３つの提言

大分県教育委員会（H28年2月）

１　学校の組織的な授業改善による「新大分スタンダード」の徹底

①生徒指導の三機能を意識した問題解決的な展開の授業を充実させるとともに、習熟度別指導を積極的に導入する。

②教科の壁を越え、全ての教科に共通した授業改善の取組内容を設定し、その視点に基づく互見授業・授業研究を実施する。

２　学校規模に応じた教科指導力向上の仕組みの構築

①小規模校は、校内研修の枠で、近隣の学校と合同教科部会をもち、 指導案や評価問題、教材の作成等を行う。

②複数の教科担任がいる学校は、教科担任の「タテ持ち」や日課表・週時程表に位置づけた教科部会の実施により、相談や切磋琢磨できる環境を作る。

３「生徒と共に創る授業」の推進

①生徒による授業評価を実施し、それを授業改善に反映する。

②学校が目指す授業像を生徒と共有し、それに向かう学習集団としての目標を設定させ、適宜振り返り活動を行う。

参考

中学校の学力向上に向けた改善　７つのポイント

中学校学力向上対策プロジェクト会議（H28年１月）

Ⅰ　密度の濃い授業を目指した「新大分スタンダード」に基づく授業改善の徹底

(1)生徒が困りや疑問を表出でき、それを解決する楽しさや必要感がある授業にすることが重要である。「新大分スタンダード」の中でも、特に生徒指導の三機能を意識した問題解決的な展開の授業の充実に努める。
(2)単位時間の評価規準を具体的に設定し、「C　努力を要する」状況の生徒への手立てをその時間内に講じるとともに、小テストや単元テスト等で学習の定着状況を把握する。
(3)評価を生かして、習熟度別指導を実施したり、指導計画を変更したり、個に応じた補充指導や家庭学習の課題提示等を行ったりするなど、きめ細かい指導を重ねていく。

Ⅱ　教科の壁を越え、授業改善を学校組織全体で進める仕組みの構築

(1)校長が授業改善の責任者であることを自覚し、リーダーシップを発揮して、全教員が授業改善に取り組む体制をつくる。
(2)教科共通の具体的な取組内容・取組指標・検証指標を設定し、授業改善の短期PDCAを実働させる。
(3)目的を明確にして、教科共通の視点による互見授業・提案授業・研究協議を行う。
(4)管理職等は、「授業観察シート」を活用した授業観察を行い、授業改善の進捗状況を把握するとともに、指導助言を通して教員一人一人の授業改善に積極的に関わる。

Ⅲ　授業改善が進まない教員に対するきめ細かい指導

(1)授業改善が進まない教員には、管理職等が個別の具体的な指導を行い、改善を促す。
(2)管理職や主幹教諭・指導教諭等は、授業観察に基づき、問題点を具体的に指摘して改善の方向性を示すとともに、一定期間を置いて、改善されているかどうか確認する。
(3)提案授業等の際には、指導教諭や学力向上支援教員が指導案作成時から関わり、事後研には指導主事も加わって、きめ細かい指導・助言を行うことを繰り返し行う。

Ⅳ　学校規模に応じた教科指導力向上を図る仕組みの構築

(1)小規模校は、校内研修の枠で、近隣の学校と合同の教科部会をもち、評価問題や指導案・教材作成等を通して、教科指導力の向上を図る。
(2)複数の教科担任がいる学校は、教科担当のタテ持ちや日課表・週時程表に位置づけた教科部会を実施し、教科の専門性に関わる相談や授業づくりの打ち合わせを行う必然性をつくる。

Ⅴ　生徒に困りや戸惑いを生じさせない指導の工夫・配慮

(1)補充指導に全教員で組織的に取り組み、「分からないところをそのままにさせない」体制を整える。
(2)学びに向かう力が高まる中学校生活のスタートを学校全体で創出する。

Ⅵ　生徒と共によりよい授業を創造する「学びに向かう学習集団」づくりの推進

(1)生徒による授業評価を実施し、それを授業改善に反映させる。
(2)特別活動の充実を図り、所属感を感じられ、安心して学べる学級を生徒と共につくる。
(3)教員が目指している授業像を生徒と共有し、それに向かう学習集団としての目標を設定させ、生徒による授業改善のPDCAサイクルの確立を図る。

Ⅶ　教員の資質向上を促す基盤整備

(1)県教育委員会と市町村教育委員会は、小中学校の人事交流を検討する。
(2)県教育委員会と市町村教育委員会は、指導教諭や学力向上支援教員の効果的な配置と活用を検討する。
(3)県教育委員会と市町村教育委員会は、各教科の核となる教員の意図的・計画的な育成・活用を検討する。
(4)県教育委員会は、部活動の指導体制等、教材研究の時間を確保するシステムについて研究する。